

ネットワークによる体験授業

田坂 さつき Satsuki TASAKA

立正大学文学部准教授

田嶋 和久 Kazuhisa TAJIMA

立正大学文学部准教授

峰内 暁世 Akiyo MINEUCHI

立正大学情報メディアセンター大崎情報システム課

菅野 智文 Tomohumi SUGANO

立正大学情報メディアセンター大崎情報システム課

水谷 光 Hikaru MIZUTANI

湘南工科大学工学部教授

近年、教壇での講義だけではなく、ビデオ教材を用いて、医療や介護の現場の視点を導入する授業が行われるようになった。これは現実社会の事象を的確に捉え、学問が机上の空論に陥らないためには重要なことである。ビデオ映像で、障害や病をもっても充実した生を営む当事者の声を聞く一方で、当事者もそれを支える家族も生活全般に関して不自由を抱えている現実を直視する。国家予算の削減が叫ばれる日本では、重い障害や難病の人に手厚い福祉政策が望めない。尊厳死か延命か、という単純な選択肢が立てられる時、例えば、重度の障害という不自由を抱え、家族の世話になり、経済的な困難を抱えて生きることを選ぶのを躊躇する学生は少なくない⁽¹⁾。教室の授業では、ビデオ映像を使ったとしても、障害や病を抱える人は自分とは関わりのない遠い人、三人称の人である。しかし他方、自分の家族等、親しい人がそのような問題に直面している学生がいる。そのように、二人称あるいは一人称で切実な問題に向き合っている学生からみると、他人事(三人称)として軽々に扱うこと自体に傷つく場合がある。

尊厳死を選択しなかった当事者自身の話を聞くと、以前は周囲に負担をかけ呼吸器をつけて生きる姿に違和感を覚え、尊厳死を選択しようと思っていたという⁽²⁾。しかし、病が「他人ごと(三人称)」から「我がこと(一人称)」となると変容する。尊厳死と決めていても、家族や友人と「かけがえのない個」としての対話を経て、意思が変化することもままある。生命に関わるこのような問題は、個人の価値観や心情とは別に、一人称の立場を重視する必要がある。⁽³⁾

それゆえ、一人称の証言を聞くために、当事者の声を聞く授業を行うことは重要である。例えば呼吸

器を装着した進行性難病ALS(筋萎縮性側索硬化症)患者を授業に招き、一人称の証言を聞くことができれば、学生は、当事者からこの問題が何であるかを聞くことにより、一人称の視点から問題を見直すことができる。しかし、当事者が大教室で、学生から遠い教壇で講演している限りにおいて、当事者の話はビデオ教材とさほど変わらない。教壇の当事者は、あるALS患者、未だ第三者である。これが変化するのは、当事者と向きあい対話する時、自己紹介し語り合う関係の中に身をおくときである。そのとき、その人はもう三人称ではなく、自分と同じ「かけがえのない個(二人称)」として現れる。

本論文は、インターネットを活用したリアルタイム通信を活用して実施することにより障害や病を生きる当事者との対話を行う授業の実践報告と、その意義についての考察である。

1. 研究の概要

本研究は、平成21年度立正大学石橋湛山記念基金研究プロジェクトの一環として行なわれた。同プロジェクトの目的は、病や障害を生きる人たちの経験・体験・視点などを共有することにより深い学びを得る授業の創成である。当事者との対面方法は、二つである。一つはネットワークを利用した通信授業、一つは当事者との直接対話である。ネットワークを利用した通信授業では、大学の教室と患者宅や施設等学外とをインターネットを活用したコミュニケーションツールを利用してつなぎ、講義やゼミを行う。この通信授業を通して、三人称であった当事者と、徐々に二人称の関係を構築する。このような授業を行うためには、当然のことながら、インターネットを利用したインフラを構築する必要がある。他方、当事者との直接対話は、当事者を授業に招き大学で

行う方法と、学生が講演当事者宅を訪問したり、当事者宅近くで対面交流を行ったりする方法がある。前者は、人工呼吸器を装着した当事者の場合は移動負担が大きく、後者は少人数の学生しか訪問できないという難点があるので、両者を可能な範囲で組み合わせる必要がある。

平成21年度同プロジェクトは、立正大学文学部哲学部の田坂ゼミと社会学部の田嶋ゼミの社会調査実習と合同で行なわれた。これは、平成18年から湘南工科大学で始まった工学のサービラーニングという教育実践が文学部の学生を対象に発展したものである⁽⁴⁾。平成20年度は、工学、哲学、社会学、心理学、社会福祉学の学生たちが参加できるプログラムを試行的に開始した。これには、重度の障害を生きる人々やALS患者の協力を仰ぎ、当事者との出会いを重視するものであったが、授業カリキュラムとの関連は薄く、体験学習に終わった感がある⁽⁵⁾。そこで平成21年度は、対面交流を頂点として、哲学科と社会学部の年間授業カリキュラムの中でネットワークによる通信授業を行った。そして夏の対面交流より前を事前学習、その後を事後学習とした。年間授業カリキュラムからすると、事前学習は1期(前期・春夏学期)、事後学習は2期(後期・秋冬学期)に行なう。事後学習終了後、成果発表として、哲学科の学生は卒業論文を、社会学部の学生は社会調査実習報告会を置いている。そして希望する学生は、卒業前に対面で卒業論文報告を行った。それゆえ、サービラーニングプログラムと形式的には一致しているが、工学部の学生のような社会貢献活動には至っていない⁽⁶⁾。しかし、ネットワークによる通信授業を通して、二人称の対話を実現した学習という点での成果はあったと考えている。

その中核となる出会い体験は以下の三形態である。

ALS患者を招いた授業(文学部哲学科選択必修科目「倫理学とは何か」「倫理学の基本諸問題」)

長期休業期間、横浜市の重度重複障害者福祉施設訪問の家「朋」「径」⁽⁷⁾、藤沢市社会福祉事業協会「ふれあいケアセンター第二作業所」で体験実習(卒業論文準備・社会調査実習)

他大学と共同でALS患者との対面ワークショップを実施(卒業論文準備・社会調査実習)

障害や病の人と出会う体験は、大学の学びと乖離してしまうと、現実から切り離された思い出としてしか残らない可能性がある。特に生命倫理を扱う哲学科の学生にとっては、臨床の現場を特別の空間と位置づけることの危険は大きい。そこでそれを避け

るために以下の方策を講じた。第一に、哲学科の低学年には、生命倫理を扱う授業の中で、尊厳死問題を取り上げるなど、授業との関連を明確にする。哲学科の上級学年に対しては、関係文献の講読を行う。第二に、平常授業の中で、当事者のドキュメンタリー映像を使用し、映像での出会いという段階を作る。第三に、哲学科及び社会学科では、からで実際に出会う当事者と、年間を通してインターネット上のコミュニケーションツール(Skype等)を利用した通信授業を継続する。第三に、両学科では、このようなコミュニケーションツール使った対話や対面交流を通して学生が学んだことを当事者にフィードバックし、Eメール等でコメント等を学生に返す。これらは、年間カリキュラムの中で行われた⁽⁸⁾。

	社会学科(立正)	哲学科(立正)	工学部(湘南工科)
授業科目	社会調査実習	上級演習 卒業論文	ボランティア論 プロジェクト実習 社会貢献活動 卒業研究 卒業演習
事前学習	<ul style="list-style-type: none"> 資料収集・グループワーク 久住氏(自宅)と授業内通信 		<ul style="list-style-type: none"> 福祉関係者との共同授業 事前研修会・ヒアリング
	<ul style="list-style-type: none"> 久住氏講演会 ALS患者通信授業(湘南→立正) 久住氏と対面交流会、一部学生遠隔参加(湘南→自宅など) 		
	<ul style="list-style-type: none"> 船後氏講演会 ALS患者通信参加 インターネット配信 福祉施設と授業内通信(径、朋) 		<ul style="list-style-type: none"> 福祉施設と授業内通信
体験実習	福祉施設での体験実習		実習、福祉ものづくり実施
	関西のALS患者との対面ワークショップと講義		
事後学習	<ul style="list-style-type: none"> 資料整理→執筆 質問、中間報告等は授業内通信 報告会 		<ul style="list-style-type: none"> 社会貢献活動報告会 福祉ものづくり報告会 製作報告などを授業内通信
報告書	<ul style="list-style-type: none"> 社会調査実習報告書 卒業論文 		<ul style="list-style-type: none"> 社会貢献活動報告書 卒業論文

2. コミュニケーションツールを活用した通信授業

立正大学でインターネット上のコミュニケーションツールを活用した授業が実現した背景は、立正大学情報メディアセンターを中心とした、遠隔教育推進体制がある。立正大学は、平成17年に文部科学省のサイバーキャンパス整備事業に採択され、熊谷(埼玉県)と大崎(東京都品川区)の離れたキャンパス間を結び、大規模な遠隔授業システムを導入している。その一方で、遠隔通信教育を推進するために教室に設置されているパソコンには、手軽に通信授業を行うためにSkypeやYahoo Messengerなどのフリーソフトや無料サービスが利用可能になっている。

また立正大学では、平成21年から「授業支援室」を設置した。学生向けの学習支援室を設置している大学は多いが、これは教員向けの支援室で、授業の中でICTを活用するサポートを行う。機材の貸し出しから、教材作りのアドバイス、ICTの操作方法に関する質問などを受け付けるだけでなく、授業中でも困ったときに電話すれば助けてくれる、サポートデスクのような機能も担っている。

本論文のインターネット上のコミュニケーションツールを活用した授業では、Webカメラの貸出や、授業開始時のサポート、通信中のトラブル対応等を常時行なっている。さらに、情報メディアセンターと協力して、円滑な通信を実現するために、教員と共に事前事後に検証を行なうことにより、授業実践後に問題点を整理し、授業改善へ向けたサポートも行っている。

ネットワークを利用した通信授業は、受講学生数と目的に応じて以下の三形態で行った。

- ・大学の授業に遠隔地から参加。大教室の授業では質疑応答の対応策の準備が必要。
- ・当事者が自宅から授業に参加。主にALS患者宅と大学の小規模教室との通信。
- ・福祉施設との通信授業。福祉施設の障害者や施設職員と小規模教室での通信。

これらの形態のいずれを利用するかを授業固有の教育目標に即して手段を考えなければならない。

われわれは、以上のような大学としての支援体制のもとに平成20年から24年、インターネット上のコミュニケーションツールを活用した授業を実施し、授業改善を行ってきた。授業において実施したネットワークを利用した対話では、大学も遠隔地も、それぞれがインターネットに接続されたWindowsまたはMacintosh OSのパソコンに通信用ソフトウェアをインストールし、リアルタイムの動画およびChatを配信して通信を行った。以下、これまでに実際に使用した通信用ソフトウェアを授業で使用する観点から考慮すべき点、ソフトウェアの特徴・評価さらに補助的事項について考察する。

通信用ソフトウェア使用に際して考慮すべき点

- A) 遠隔地との通信者の数 (1対1通信であるかN対N通信であるか)

授業の目的によって、1対1通信あるいは、N対N通信が必要である。このため、目的に応じてソフトを使い分ける必要がある。

- B) 回線の帯域などの影響

インターネット通信は帯域および経路が保障されていない。授業の際に利用できる帯域が狭い場合でも、影響がなく利用できることが望ましい。

- C) Chatの効用

ALS者の病状が進行すると、人工呼吸器を装着することがある。このような重度の患者の場合には発話することが難しく、Chatを利用して会話を行う。このため、Chat機能が充実して利用しやすいこ

とが重要である。顔面センサー等でのタイプ入力にはかなりの時間を要するため、一対一の場合、一問一答となり、テンポの速い対話は成り立たない。ところが同病の複数の方々とChatをすれば、タイプが速い方から順番にコメントを紹介することができ、個々にタイプを急かせることがなくなる。

- D) 使いやすさ

授業などで使用する場合、操作の回数が少なく簡単な操作で利用でき、誰でも簡単に利用できることが望ましい。教員や学生が簡単に利用できるだけでなく、ALS患者が楽に使用できるように、マウス操作のみではなくキーボード操作で利用できることが望ましい。

- E) ファイアーウォールの問題

大学間、あるいは大学と個人宅とをインターネットを介した通信を行う場合、各大学に設置されているファイアーウォールにより通信が遮断されるため、利用できないソフトウェアもある。

- F) ビデオ映像

実際に動画を送る場合には、ビデオカメラが必要である。教室の様子を施設に送ったり、施設の様子を送ったりしてもらうためには、USB接続の低画素のカメラでは不十分である。本プロジェクトでは、ハンディカム(ズーム40倍)のAV出力をUSB接続のビデオコンバータを介して、コンピュータに取り込むことによって高品質な動画を得ている。

ソフトウェア等の特徴・評価

- A) Skype

Skypeは、フリーソフトの中で安定して動作するソフトウェアのひとつである。従来、1対1の通信のみをサポートしていたが、現在ではN対Nの通信が可能である。回線の状況によって、使用する帯域を自動調整する機能などもあり、通信は比較的安定し、音声も画質も良好である。ただしChatの文字の大きさは指定できない。

- B) Yahoo Messenger

Yahoo Messengerは、3台以上のコンピュータを使ってカンファレンスする機能があり、N対Nの通信が可能である。また、複数のユーザーでChatを利用することができ、文字の大きさなどを指定できる。ただし、ファイアーウォールによって必要なポートが遮断されることがあり、確認を要する。また、画質はSkypeほど良好ではない。

- C) Windows リモートアシスタンス

Windowsのリモートアシスタンス機能を利用する

と、遠方にある Windows コンピュータを遠隔操作し、パワーポイントなどを利用した発表を遠方から行うことができる。ただし、ファイアウォールによって必要なポートを遮断されることがあり、確認を要する。

D) メール

発話が障害や病ゆえにできない方々は、パソコンの音声機能を用いて音声または Chat で通信するが、入力にかなりの時間を要するため、リアルタイムの応答は極めて短い。授業時間を有効に活用するために、学生は事前にメールで質問などを送り、患者は、回答や学生へのメッセージを予め準備している。さらに授業後にも学生はメールで質問をしたり、卒業論文等を送付してコメントを返信してもらったりしている。補完的に有効なツールである。

E) 掲示板

学生は「災害時に ALS 患者をどう支援したらよいか」など、時間をかけて検討したい課題については、掲示板を利用して意見交換を行なっている。

3. インターネット通信授業の実施例

3-1. 大教室と複数の患者宅

平成20年から毎年、ALS 協会千葉県支部会員（患者）船後靖彦氏の講義を行っている。その中で、和歌山在住の ALS 協会近畿ブロック会長（患者）和中勝三氏と同協会会員（患者）林静哉氏、大阪在住の同協会会員（患者）久住純司氏を交えてインターネット通信による対話を実施した。Yahoo Messenger と Skype を用いて、4 箇所の遠隔地相互の通信である。



写真1 船後靖彦氏の公開講演会

左のスクリーンに林氏、和中氏、久住氏が Yahoo Messenger によるインターネット通信で映し出されている。右のスクリーンは、船後氏が使用している意思伝達装置「伝の心」の画面が映されている。船後氏の講義に対して和中さんは Chat から「船後さんの言うとおりです。」というコメントを送る。林氏は



写真2 質疑応答する船後靖彦氏

講義を聴講した感想を「寝ながらにして参加できる通信授業を初めて見た時は思わずこれはテレビの世界だと叫んでしまいました。」とメールを寄せた。

授業中の対話では、顔面センサー等でタイプ入力する方に、テンポの早い一問一答で応答を求めない配慮が必要である。そのため、同病の複数の方々と同時に参加して Chat ができる Yahoo Messenger を使用している。Yahoo Messenger は、3 台以上のパソコンでカンファレンスする機能があるので複数参加者でも利用でき、ベッドから見える大きな文字に指定して Chat をすることもできる。ただ、画質はあまり良いとはいえない。写真1の左のスクリーンは、林氏、和中氏、久住氏のビデオ映像と Chat 画面である。

ALS は人により進行も症状も異なる。久住氏は音声による Skype で通信ができる。Skype は、回線状況によって使用する帯域を自動調整するため、画像が表示されずに音声のみに限られてしまう場合もあるが、通信は比較的安定していた。林氏、和中氏は音声による通信ができなため、Chat のみとなる。そしてベッドから見える大きさの文字に調整しなければならぬので、Skype ではなく、Yahoo Messenger を使用した。当日は、哲学の関連科目で聴講希望があったので、船後氏の講演映像と関西との通信映像とを Skype で別教室にも送信した（図1）。

この講演は、1年、2年を対象とした生命倫理の授業の一環として行なっている。学生の学習の動機



図1 インターネット通信授業 (2009年10月3日)

ALS患者の講演を別教室へSkype配信
遠隔地のALS患者とSkype通信も同時に実施
(大崎1151教室にて)【2009/10/3講演】

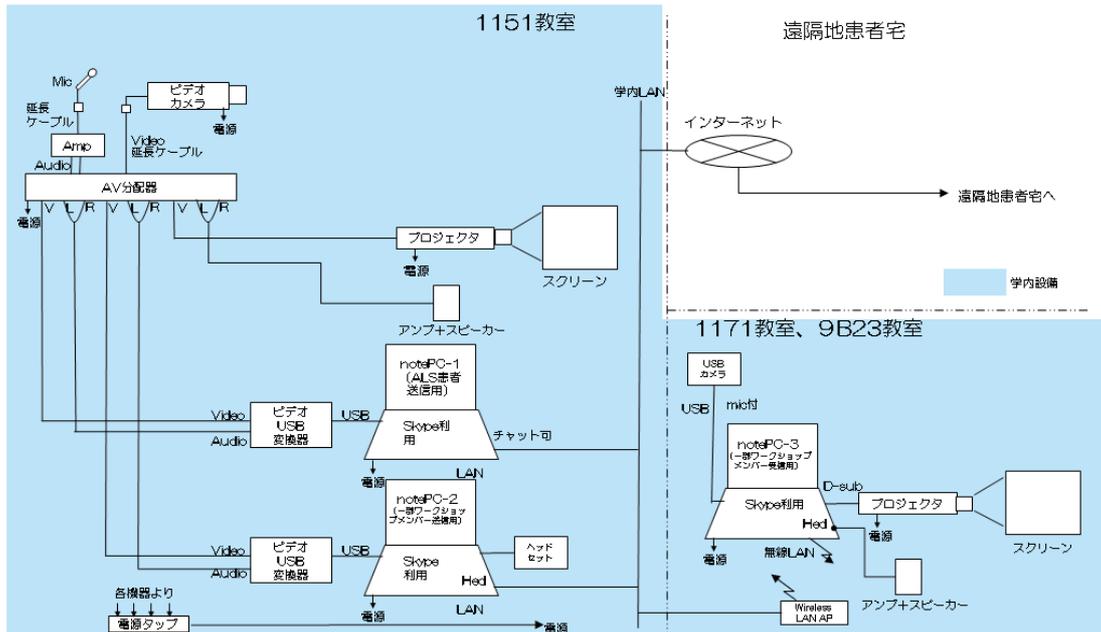


図2 インターネット通信授業配線図

づけを目的としているが、尊厳死問題を二人称から考えるきっかけとなっている。

3 - 2. 小規模教室と患者宅や福祉施設

平成21年4月20日、立正大学の教室とALS近畿ブロック技術ピアサポータ久住純司氏自宅と教室とのSkype通信による授業を行う。授業の様子は、以下の通りである。「講義室スクリーンに車椅子の男性の笑顔が映し出された。進行性難病ALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者久住純司さんである。大阪の自宅から語りかける久住さんの声とそれに応える学生の声が教室に響く。和歌山在住の林静哉さんは、ベッドの上で微笑んでいる。（中略）講義の終盤、研修先の一つに予定されている福祉施設訪問の家「朋」とインターネット中継がつながった。クッキー作りという作業内容を紹介してと言われて、懸命に伝えようとしている重度の障害のあるメンバーの姿映す画面を、学生たちは引き込まれるように真剣に見つめる。その紹介が終わると、教室と施設双方から、拍手と歓声。心の中で何かが生まれた。講義を受けていた約30人全員が、中継の最後には、画面に向かって手を振っていた。」⁽⁹⁾

ネットワークを利用した通信は、ビデオのように第三者的な視点から観るのではなく、当事者との対話という文脈に巻き込まれる。拍手や歓声という応答だけでも、相手との双方向性が生まれている。

3年、4年を対象とした授業では、卒業論文準備のための研修の事前学習として通信を行う。写真3は例年関西で行うALS患者との対面ワークショップで会う久住さんと、写真4は、夏の研修先である社会福祉法人訪問の家「径」との通信、久住氏と通信である。いずれもこの通信では、発話可能な方々との対話なので、Skypeが使用された。

コミュニケーションツールを活用した通信による対話によってお互いの心理的な距離が縮まり、研修における短時間の出会いの中で濃密な時間を過ごすことができる。

学生たちは、通信授業、研修を経て、それぞれの生命倫理のテーマに即して、卒業論文を執筆する。執筆中の論文は、メールで訪問の家職員及び、ALS患者三氏に送付し、助言等を受けて完成させるが、久住氏からは、授業内に卒論の助言を受けている。写真5と写真6では、大教室の授業であるにもかかわらず、学生は臆することなく堂々と、卒論原稿を読み上げている。文献研究だけでなく当事者との対話を通して書き上げた卒論に誇りを持っているように見受けられた。

3 - 3. 他学部とのキャンパス間遠隔通信

生命倫理は医療や看護、社会福祉の現場や、広く現代社会で問われるものであり、哲学という領域で閉じることができないものである。そこで、文学部



写真3 久住純司氏宅と立正大学の教室



写真5 卒業論文の講評（学生）



写真4 訪問の家「朋」と立正大学教室



写真6 卒業論文の講評（教室）

哲学科だけではなく、異なった専門領域との交流が必要であるが、特に社会福祉学部との連携は重要である。立正大学は、熊谷キャンパスに社会福祉学部があるが、遠隔地であるために、大崎キャンパスの文学部とは合同授業ができない。そこで、サイバーキャンパス整備事業により設置された遠隔授業シス

テムを利用し社会福祉学部准教授保正友子氏の協力を得て、平成22年度に、両学部4年生のゼミ間の合同授業を行った。その際、大崎キャンパスでは大阪の久住氏とはSkypeによる通信も同時に行ない、熊谷キャンパスに配信した（写真7、写真8）。



写真7 社会福祉学部との遠隔通信授業



写真8 遠隔通信授業内でのSkype通信

4. 教育効果

本研究では、立正大学社会学と哲学科の学生に対して、インターネット通信の前と後で、学生のイメージがどの様になったか、自由記述でアンケートをとった。それに哲学科の学生の卒業論文も加えそれらの中で、ネットワークを活用した通信の教育効果と思われるものを下記に抽出する。

4 - 1. 文献だけから抱くALS患者のイメージ

- ・ALS患者は、昔の思い出に浸っている
- ・将来の夢もなく、生きていたくないのでは？
- ・別世界の存在
- ・暗く重いイメージ
- ・「かわいそう」という感覚

4 - 2. インターネットを活用した通信後のALS患者のイメージ



写真9 久住純司氏との通信

4 - 2 - 1. 大教室での通信 (ALS 患者船後氏)

- ・難病患者であろうと、自分の生きがいを見つけたり、充実した日々を送っている人たちが数多くいるということに気付かされた。また、私たちは勝手なイメージによる解釈をしていることに気づきました。
- ・ALS 患者さんには、生きる力が私たちよりも数倍ある。
- ・肉体的なものは違って、中に秘めたものは私たちと変わらない、あるいは私たちよりも強いものを持っていると感じた。

4 - 2 - 2. 小規模教室での通信 (ALS 患者久住氏)

- ・お父さんみたい。
- ・前向きに語る患者さんから、幸せや生きるということを教えてもらいました。
- ・顔を合わせることでしか見えないものもあると思う。
- ・本を読むのとは違った発見があります。

4 - 2 - 3. 小規模教室での通信 (社会福祉法人 訪問の家「径」)

- ・障害のある人たちは自分と遠い存在同士と考えていたが、それは健常者の目線ではないことがわかった。
- ・重度身体障害の方は、こちら側にはっきりわかる形で意思表示できないと思っていたが、そうではなかった。
- ・生き生きとしている姿が印象的で、先入観にとらわれすぎていることを感じた。
- ・通信でつなぐことにより、質問や回答をクラス全員で共有できた。
- ・自分が持っていたイメージと実際にあって持ったイメージの違いの発見や、質問を考える上でも、中継は重宝した。
- ・資料解読も大切であるが、顔を合わせる事は重要。
- ・画面を通してであるが、短い授業の時間の中で触

れ合うことができるので、私たちに多くのことを気づかせてくれると考えています。

- ・施設の中がどうなっているか見えるのはいいと思う。また、授業をしている教室が向うでも見えているのにも感動した。

4 - 3. 対面交流後

4 - 3 - 1. 船後氏と社会学科学生

- ・前知識として得た情報から推測すると重く暗いイメージを抱いていました。でも、お会いすると、明るい笑顔や会話の中に出てくるユーモアな表現など、面白く明るい人だなーと私の不安を一気に解消してくれました。
- ・船後さんは、表情がよくわかり、生き生きとしていて私たちと変わらないと感じた。



写真10 訪問の家「径」との通信

4 - 3 - 2. 久住氏と哲学科学生

- ・ALS 患者さんの久住純司さんの『私には尊厳死が正しいとか、間違っているなんて断言できない。だってその苦しみは本人にしか分からないだろうから。』という言葉聞いて、またそのことに関して『僕たちがやっている哲学は、患者さんを助けることのできる医療や機械を作り出すことはできない。一体どうすればいいのでしょうか。』と、哲学は無力なのではないかと投げかけた生徒に対しての、『だからこそ、人の苦しみは決して他人には分からないからこそあなたたちは投げかけてください。ほかの人々にも考えさせてください。』とおっしゃってくださった言葉で、私がなすべきことは考え続けることだと思った。出逢いを喜び、別れを悲しみ、人を大切にすることで、その人から与えられる計り知れない大きなものを得ることができるのではと感じた。

4 - 3 - 3. 福祉施設 (哲学科の学生)

- ・文献では「障害者」という遠い存在だと考えていたが、さんという個性豊かな人として捉える

ことができるようになると同時に、障害者と健常者を隔てている壁が崩れていく。

- ・言葉がない人でも、サインを見つけてコミュニケーションがとれる。

4 - 4. プログラムを終了して

- ・今まで、自分が生きることに対して、どれだけ一生懸命に生きてこれたのかということを考えるようになりました。
- ・私は普通の人間で、難病患者の人たちは特別な人間なんだと頭の中で勝手に線引きを行っていたと思う。
- ・だが、実習を重ねていくうちに「普通の人間でそもそも何だよ」と思い始め、人間に普通も特別なんだなあと感じるようになった。それに難病患者が何を考えているのかわからないのではない、彼らは目や動作、雰囲気でおちらに話しかけているのではないか？そもそも我々が彼らの意思を読み解く努力を怠ってきたのではないかと感じるようになった。
- ・努力や関わりを断っていたのに、「彼らは何をを考えているかわからないから」などと考えてしまっていたことを恥ずかしく思い、これからは偏見の眼差しを送るのではなく、少しでも関わってあげたいなと感じるほどイメージが変わった。
- ・ALSの方がとても活動的で、生というものを私たちより重く、そしてなにより、私たちにその生への重さ、そして生への大切さを教えてくれる素晴らしい方というイメージに変わりました。

このようなコミュニケーションツールを活用した対話によって、お互いの心理的な距離が縮まり、研修における短時間の出会いの中で濃密な時間を過ごすことができる。写真12では、初対面の人であれば尋ねにくい倫理問題について学生は質問している。写真13と写真14では、初めての介助であるが、緊張も少なく、打ち解けた笑顔で行なっている。



写真11 船後靖彦氏講演後の対面交流会



写真12 久住純司氏との対面交流



写真13 訪問の家「径」での実習



写真14 訪問の家「朋」での実習

5. まとめ

以上、ネットワークによる体験授業のプログラムをたどり、学生の自由記述などから教育効果を見てきた。そこには、プログラムの進行と平行して、インターネットのコミュニケーションツールを活用した通信授業をおこなうことによって、当事者と心理的な距離が縮まる過程を垣間見ることができる。

当事者の講演後に対面交流を行ない、対面交流やワークショップを実施することは、直接の出会いの貴重な機会を作る意義がある。しかしごく短い時間しか対面できないならば、直接対話できる人数は限られてしまう。しかも、初対面の出会いではお互いに緊張もし、打ち解けた会話には至らない。質問したいことがあっても、初対面では遠慮してしまう。率直な対話ができる二人称の関係を構築するには時間がかかるのである。そこで、施設や当事者宅と通信事業をインターネットのコミュニケーションツ-

ルを活用して通信授業を行なうことにより、段階を踏んで、直接対話の機会を増やし、いわば二人称のポジションを固めている。そして次第に、お互いに固有名で呼び合える関係性の中で、「かけがえのない」個であることを体感していく。そして書物から、ビデオから、通信授業から、対面交流から築いてきた思索を、自分のテーマへと収斂していく。この過程は重要である。遠隔通信授業や対面交流なくしては、彼らの卒業論文はこのような思索には至らなかったと思われる。

このネットワークによる体験授業には、工学や心理学を専門とする学生が、関東だけでなく関西の他大学から参加しており、平成22年から異領域連携による福祉ものづくりも始まった。また、ものづくりを通して広がったネットワークの中で、領域を超えた哲学対話も同時にはじまった。このように、遠隔地と教室を結ぶネットワークを活用することにより、当事者と教室、そして、キャンパス間、そして他大間の連携が今後も期待される。

<謝辞>

平成21年度のネットワークによる体験授業プロジェクトは、多くの方の協力によって初めて実現したものである。ALS協会千葉県支部会員湘南工科大学非常勤助手(平成21年当時、現在は同大テクニカルアドバイザー) 船後靖彦氏、ALS協会近畿ブロック会長和中勝三氏、同ブロック技術ピアサポータ久住純司氏、同ブロック林静哉氏には、講義や夏の対面交流、通信授業において、多大な協力をいただいた。また、社会福祉法人訪問の家「朋」「径」のメンバー、そして施設スタッフの皆さまには、福祉の現場に暖かく学生たちを迎えていただいた。ここに心からの感謝を申し上げる。

<参考文献>

田坂さつき、石村光敏、水谷光、二見尚之、眞岩宏司、本多博彦、木村広幸、勝尾正秀『工科大学におけるサービスラーニング教育：工科系の特質を生かした社会貢献活動実践型授業科目』湘南工科大学紀要41巻1号、2007年、pp.111-123。
田坂さつき、木枝暢夫、石村光敏、大野英隆、水谷光、二見尚之、眞岩宏司、本多博彦、木村広幸、佐藤博之、水澤弘子『体験による気づきから学びを引き出す「サービスラーニング」 - 工科系の特質を生かした社会貢献活動体験型授業科目』湘南工科大学紀要42巻1号、2008年、pp.107-124。

市山雅美・田坂さつき・日高友郎・水月昭道・大野英隆「ALS当事者との出会いからはじまるサービスラーニング 湘南工科大学・立命館大学・立正大学との連携によるITプロジェクト報告」『湘南工科大学紀要』第43号1巻、2009年、pp.119-134。

桜井政成・津止正敏編著『ボランティア教育の新地平』ミネルヴァ書房、2009年、pp.51-79、215-226

峰内暁世・菅野智文・中村和弘・山下倫範「簡易コミュニケーションツールを利用した体験授業システムの検討」『パーソナルコンピュータ利用技術学会全国大会講演論文集』2009年、pp.53-56。

田坂さつき「死生の現場における問答」『倫理学年報』59集、2010年、pp.25-34。

保正友子 2010年10月「多領域の学生との遠隔通信による協同授業の成果と課題～文学部哲学科田坂ゼミと社会福祉学会保正ゼミとの協同授業の振り返り～」『立正社会福祉研究』12号、2010年、pp.27-33。

田坂さつき・峰内暁世「遠隔通信を活用した生命倫理の授業」『大学教育と情報』2011年度No.3、pp.19-21。

田坂さつき「当事者との出会いを核とする生命倫理教育プログラム」『立正大学人文科学研究年報』48号、2011年、pp.1-15。

田嶋和久「コミュニケーションの場の形成とインターネットを活用した社会調査の教育効果 - ALS患者と重症心身障害者への調査を事例として」『立正大学人文科学研究年報』49号、2012年、pp.19-28。

田坂さつき「当事者との対話による生命倫理の探究」『立正大学人文科学研究年報』49号、2012年、pp.1-18。

<註>

- (1) 経済的にも含めて様々な負担を負うのはどうして家族だけなのか、人の役に立つとはどういうことなのか、という点については別の考察が必要である。これについては、大谷いづみ『いのちの教育』に隠されてしまうこと「尊厳死」言説をめぐって』『問い』を育む『生と死』の授業から』松原洋子・小泉義之編『生命の臨界 争点としての生命』人文書院、2005年、pp.91-155。を参照。
- (2) ALS協会千葉県支部船後靖彦氏の立正大学における講演および、ALS協会近畿ブロック会長 和中勝三氏、同協会同ブロック 林静哉氏、久住純司氏との平成21年度共同授業より。このような変化は、家族の切なる希望等別の理由もあるが、死の捉え方が三人称から一人称に視点が変わることによる影響も考慮すべきで、当事者の自己決定が未だ三人称に留まる時点では、そのリビングウィルは死を目前にした時

- と大きく変化する可能性が高い、とわれわれは考える。
- (3) 大谷は、授業を受ける学生自身が、質による生命の序列化を推奨する社会の生き難さとこの問題が繋がっていることを自覚することが重要であり、生と死の問題群から自分を棚上げせず、自らの実存を問うべきだという。われわれは、大谷の指摘は的確だと思うが、そのような実存的な問題を、一人の講師が教壇で講義することには限界があると考えている。その一方で、自己決定の重要さが説かれるなかで、当事者の視点から生命倫理の問題を問い直すことが求められている。それゆえ、当事者の視点から実存的な問題を把え直すことが重要になる。
- (4) サービスラーニングとは、英米で先駆的に取り組まれているこの教育方法であり、経験という側面から教育を捉える系譜に属し、社会貢献活動に、省察的な思考、コミュニティを中心に置いた教育、他者への福祉を志向した活動価値を見出すものである。高等教育では、学生の学びや成長を増進するような意図を持って設計された構造的な機会に、学生が人々や地域社会のニーズに対応する活動に従事するような経験教育の一形式とされ、省察、互恵がキー概念だとされる。Jacoby, B. 'Service-Learning in Today's Higher Education,' in Jacoby, B. etc al. *Service-Learning in a Higher Education : Theory and Practice*, Jossey-Bass Publishers, 1996, 3-25 (山田一隆訳「こんにちの高等教育におけるサービスラーニング」桜井政成・津止正敏編著『ボランティア教育の新地平』ミネルヴァ書房、2009年、p.55.)を参照。サービスラーニング型授業の構築の過程については、下記を参照されたい。田坂さつき、石村光敏、水谷光、二見尚之、眞岩宏司、本多博彦、木村広幸、勝尾正秀『工科系大学におけるサービスラーニング教育：工科系の特質を生かした社会貢献活動実践型授業科目』湘南工科大学紀要41巻1号、2007年、pp.111-123。および、田坂さつき、木枝暢夫、石村光敏、大野英隆、水谷光、二見尚之、眞岩宏司、本多博彦、木村広幸、佐藤博之、水澤弘子『体験による気づきから学びを引き出す「サービスラーニング」 工科系の特質を生かした社会貢献活動体験型授業科目』湘南工科大学紀要42巻1号、2008年、pp.107-124。
- (5) この取組みは、立命館大学先端総合学術研究科 GCOE「生存学」創成センター（代表 立岩真也）との協働のもとに行われた。プログラム内容の詳細は註(1)を参照。
- (6) 平成21年度は、同年立正大学石橋湛山記念基金研究（代表 友永昌治）により、立正大学文学部社会科学科、湘南工科大学工学部、立命館大学 GCOE 生存学創成センターそれぞれの研究者との共同研究において実施されたが、人文科学研究所の助成は、主として文学部哲学科田坂ゼミの学生の対面交流会および教育効果調査データの作成に当てられた。
- (7) 社会福祉法人訪問の家「朋」は、1986年に全国で初めて「重度重複障害者が通所する施設」として、現在の神奈川県横浜市栄区に「精神薄弱者通所更生施設（現知的障害者通所更生施設）朋（とも）」として開所した。重度重複障害者は家族から離れて入所施設で生活する以外の選択肢が考えられなかった当時、住宅街に開所したこの施設で、言葉がなく身体的にも厳しい重度の障害を持つ人々が、家族から離れて日中活動をし、夜は家族と過ごすという、先駆的な取組みが始まる。日浦美智江『朋はみんなの青春ステージ』ぶどう社、1996年、pp.59-130を参照。「径」は平成11年に社会福祉法人型地域活動ホーム「サポートセンター径」として開所。
- (8) 21年度に人文科学研究所共同研究として実施した「当事者との出会いを核とする生命倫理教育プログラム」。詳細は、田坂さつき「当事者との出会いを核とする生命倫理教育プログラム」『立正大学人文科学研究所年報』48号、2011年、pp.1-15、田嶋和久「コミュニケーションの場の形成とインターネットを活用した社会調査の教育効果 - ALS 患者と重症心身障害者への調査を事例として」『立正大学人文科学研究所年報』49号、2012年、pp.1-18。を参照されたい。